

2016 年度グローバル・コミュニケーション学部
教育、研究、社会貢献活動に関する自己点検・評価結果について

1. 教育活動

本学部では開設以来、各教員がシラバスに記載した授業内容や到達目標を踏まえ、補助教材、パワーポイントの作成、e-class などの情報システムの活用をとおして、教育効果を最大限に上げるべく、鋭意努力してきた。また、演習系、講義系いずれの授業においても、頻繁な課題提出、ディスカッション、ペアワークやグループワークなどのアクティビティによる学生の積極的な授業参加を促すと同時に、きめ細かなフィードバックを与えて、学生の主体的な学びを促す工夫を行ってきた。2016 年度から、全コースで新カリキュラムが導入され、さらなる教育効果の向上が見られた。

最終学年の 4 年次生の授業においては、学びの総括として、演習科目における論文指導や、「Seminar Project」におけるプロジェクトの企画・運営の指導を行い、本学部が目指す実践と教養のバランスのとれたカリキュラムの理念を実現している。

また、初年次教育が特に重要との考えから、1 年次生の授業出欠状況に関する情報共有を組織的に行い、指導が必要な場合は、学生を適宜呼び出した。このように、学生との対話を通じたきめ細かい教学指導を徹底することで、一人ひとりの学生が、高校から大学へと円滑に学びを移行できるようにした。

正課授業以外の教育活動の主なものとしては、ロチェスター大学の短期留学プログラムの学生との交流行事、学生機関誌『Cosmos』の発行に加え、新たに、日本語コースの留学生と英語・中国語コースとの「タンデム・パートナー」制度を創設し、日本語コースの留学生と英語・中国語コースの学生との交流を促進し、相互に学びを深めていける環境を整えた。

こうした取り組みを継続的に行った結果、「高度な外国語運用能力を駆使して **facilitator**、**negotiator**、**administrator** として活躍できる国際人を養成する」という本学部のディプロマ・ポリシーを達成できた。

2017 年 3 月には第 3 期生（2013 年度生）が卒業したが、高度な外国語コミュニケーション力、異文化理解力、問題発見・解決能力を身につけた本学部の卒業生は、社会でも高く評価されており、前年度に引き続き 2016 年度も好調な就職状況となった。

加えて、英語コースでは 2016 年 3 月に文部科学省に提出した教職課程設置申請書類が審査を経て認可され、2017 年度より、高度な外国語コミュニケーション能力を習得し、次世代の英語教育を牽引する中学校、高等学校英語科教員の育成を開始できることとなった。

2. 研究活動

教員は言語学、社会科学、教育学、文化研究、文学などの諸分野で、著書、論文執筆に加え、学会での研究発表、シンポジウムのパネリスト、ポスター発表などの活動をとおし

て活発に研究活動を行った。(詳細は、本学研究者データベース参照。URL:
<https://kenkyudb.doshisha.ac.jp/>) また、本学部の教員と学生によって構成されるグローバル・コミュニケーション学会の学術誌『コミュニカーレ』第5号も発行された。

3. 社会貢献活動

多くの教員が学会運営のための委員職につき、学外の社会活動に積極的に関わった。また、市民講座での講演、高等学校からの要請による模擬講義への協力をとおして、研究成果を社会に還元する活動を行った。さらに、京田辺キャンパスにおける同志社クローバー祭で地元の子供たちに外国語を学ぶ楽しさを体験してもらう催し物を開催した際には、学生の指導にあたり、地域社会への貢献も積極的に行った。